

軍用鉄道松戸線に関する初期調査

—陸軍鉄道連隊・陸軍工兵学校に着目して—

日本大学 学生会員 ○ 鶴岡 智史
日本大学 正会員 川西 崇行
日本大学 正会員 伊東 孝

1. はじめに

本研究では、軍用鉄道松戸線建設にかかわった2つの部隊に着目する。土木分野には直接のかかわりのない部分もあるが、各部隊がどのような教育・訓練を受け、また鉄道建設から機関車の運転・運行までをおこなえ得たのかを明らかにする。鉄道第二連隊は、戦後、新京成線の創設時期のメンバーとしても活躍しているので、今後、鉄道連隊が各地域で鉄道敷設をおこなってきた状況を知る上でも貴重な資料になることが期待できる。

2. 軍用鉄道とは

軍用鉄道は、陸海軍が軍専用路線として敷いたもの、あるいは太平洋戦争頃に一般の鉄道を軍用に使ったものである。

一般的に国有鉄道から、軍事基地への物資・兵員輸送用として使われる引込み線が多い。また、軍事施設内の輸送のためにつくられたものもある。

しかし千葉県には、国内唯一の演習線が存在し、鉄道兵の訓練に使われた。

3. 工兵について

工兵発足当時は、土工兵、造築隊と呼ばれ、土工、建築が主な任務であった。一般的に工兵の分野は広範多岐にわたる。中でも、もっとも一般的な野戦工兵は、築城、渡河、交通などであった。

しかし日清戦争の経験から、鉄道、電信の2分野が新たに部隊編成（後の、鉄道隊と電信隊である）されるようになった。

さらに日露戦争、旅順攻囲戦の経験から、坑道専門の工兵が編成された。今までの築城、渡河、交通専門の工兵を「甲工兵」、坑道専門の工兵を「乙工兵」とした。

第一次大戦の経験から、重架橋、重栈橋などを専門にする工兵が編成され、「丙工兵」とし、大正末期まではこの3種の工兵で本流を形成した。

満州事変後には新たに、さまざまな工兵が誕生した。

工兵は、他の兵科にくらべ、世界の科学技術の知識や多くの技術の修得が必要だったため、教育期間が長かった。

4. 陸軍工兵学校について

陸軍工兵学校は、大正8年4月10日、学校条例発布により、千葉県松戸町相模台に創設された。翌9年8月21日までに学校本部、教育部、教導隊の編成が終了し、同年12月1日に第1回の将校学生の教育が開始された。終戦直前まで学生は在学し教育を受けていたが、昭和20年8月25日学校の復員が下令され、同月30日復員が完了、陸軍工兵学校はその歴史に幕を閉じた。

陸軍工兵学校が、他の兵科の学校より遅れて創設されたのは、上原勇作元帥が工兵監であったときに、「工兵の教育は兵監自らがおこなう。あえて学校を設ける必要はない」と主張、これに対し、当時強く反対意見を述べるができるものはいなかったからである。しかし宮原少佐がイギリスより帰国し、速やかに工兵学校の建設が必要であると説明、軍備整理の時期を狙い工兵学校を創設した。

陸軍工兵学校の主な任務は、学生に工兵に必要な技術を修得させるとともに、各隊に普及し、あわせて工兵に関する学術調査および研究をおこない、工兵教育の進歩を図ること。前項のほか幹部候補生隊、下士官候補生隊において、工兵科予備役将校、工兵科下士官に必要な基礎教育をおこなうことを目的とした。

5. 鉄道兵について

鉄道兵の起源は、明治27、8年征清の役において山海 - 天津間の鉄道改築修理、およびこの鉄道に連絡する軽便鉄道の敷設のため、明治28年3月臨時鉄道隊と臨時軽便鉄道隊が編成され、そのときの兵士を鉄道兵とよんだ。

日本国内に常設の鉄道隊が編制されたのは、翌29年11月28日で、大隊本部および3中隊と材料廠を牛込区河田町の陸軍士官学校内に設置した。平時は近衛師

キーワード：陸軍鉄道連隊 陸軍工兵学校 軍用鉄道 松戸線 新京成線

連絡先 〒274-8501 千葉県船橋市習志野台7-24-1 電話 047-469-5572 FAX047-469-2581

団に所属し、部隊長は工兵大佐であった。

その後明治39年、千葉県習志野に派遣隊をおき、津田沼 - 深山間の軍用軽便鉄道の運行・管理をおこなった。

鉄道隊は、明治40年9月鉄道連隊編制を命じられ、千葉町に連隊本部、第一大隊、第二大隊および材料廠、津田沼町に第三大隊を駐屯した。

太平洋戦争中の鉄道連隊は、20個の連隊といくつかの独立部隊ができ、アジアの各地で、鉄道の整備、運行、復旧、占領をおこない、日本軍の輸送、移動をささえた。

鉄道兵の主な任務は、きわめて多岐にわたる。内容は、測量、路盤構築、敷設、架橋、漕舟、通信、爆破といった工兵と同じような任務から、列車の運転・運行をおこない、また旋盤、製缶などの機械技術や戦闘までもおこなった。

6. 軍用鉄道松戸線

6 - 1 線路敷設に関して(図 - 1)

軍用鉄道松戸線は、陸軍工兵学校と鉄道連隊によって建設された。区間は津田沼から松戸までの本線と、工兵学校から矢切へ延びた工兵学校支線である。陸軍工兵学校は、工兵学校から陸軍八柱演習場までと工兵学校から矢切までの工兵学校支線の一部、鉄道連隊は、軍用津田沼駅から陸軍八柱演習場までと工兵学校から陣ヶ前までの工兵学校支線の一部を建設した。

陸軍工兵学校は、大正13年に軽便鉄道を学校のあった相模台の東側から陸軍八柱演習場までの区間を建設した。工兵学校はさまざまな機材・資材を用いるため、それらの運搬には鉄道が必要不可欠であった。

その後、昭和3年から昭和7年までの間に軍用鉄道松戸線の出発点となる軍用津田沼駅(現在のJR総武線津田沼駅の東側300mの位置)から、鉄道連隊によって工事がおこなわれた。この間、陸軍工兵学校は昭和5年頃に工兵学校から陣ヶ前までの路盤を建設、その後は、線路の敷設・撤去を繰り返しおこなった。

昭和16年頃には線路は矢切付近まで延伸されているが、昭和19年の地図では矢切までの線路はなくなっている。

この工兵学校支線は、陸軍工兵学校と鉄道連隊の演習用の路線であったため、軍用松戸線の完成時期は明らかではない。

6 - 2 軍用鉄道の運用

軽便鉄道では、ドイツ製の軍用双合式軽便機関車(タンク式機関車2輦の後部を互いに連結した特殊な形

状の機関車)を用い、貨車はトロッキ式で車輪と車体を簡単に切り離すことができ、1列車15～20両の編成であった。速度は、走行中に楽に飛び乗れ、飛び降りることができる程度であった。

軍用列車なのでふつう一般者は乗れないが、松戸線では時には地域住民の便乗を無料で黙認し、予約をすれば荷物や農作物を運ぶなど、地域住民と密接な関係があった。住民は、" 軽便鉄道 " と呼んで親しんだ。

7. 軍用鉄道から民間鉄道へ¹⁾

戦後、旧鉄道連隊の元将兵は、国鉄や私鉄に職を求めたものが多かった。現在の新京成電鉄にも入社し、軍用鉄道の払い下げを企図した。これは、演習線を熟知していた鉄道兵であったから、再利用という発想が出た。

線路の建設工事がおこなわれたのは、昭和22年からで、全線開通は、8年4ヶ月にもわたる長期事業となった。当時は、資材が不足しており、資材調達に苦労した。そこで、旧軍用資材を求めて関東一円にわたり奔走した。

8. おわりに

軍用鉄道松戸線は、2つの部隊によってつくられ、利用されていたことを明らかにした。軍用線なのに住民も利用、地域の発展に貢献した。戦後、旧鉄道兵によって路線が再利用され、現在でも新京成線として地域住民の足として利用されている。



図 - 1 軍用鉄道松戸線概要図

参考文献

1) 新京成電鉄株式会社社史編纂『新京成電鉄五十年史』平成9年5月